

セツ の ひん

NO.62



ひと言 東日本大震災に言葉もないけれど…

須藤 道子（センター運営委員）

誰も想定しなかった天災
被災のあとの卒業式で「運命を受けとめて」と答辞した中学生の言葉が痛々しい。人知を試すかのような天変地異。理不尽にも誰の上にも等しいわけではない受難の中にある被災地の人々を想う。ひとつひとつのいのちの重さを想う。

大切な人を奪われた人々の悲しみや辛さや悔しさに到底及ぶべくはないとは知りつつも、ありとあらゆる想像力をかき立てて祈るばかりだ。そして、犠牲となった人たち、とりわけ、明日目覚めることを疑わなかったであろう子どもたちが生きるはずだった「未来」への責任を、自分の立ち位置からしっかりと果していこうと改めて心に誓う。誰も想定しなかった人災

「フーモアフクシマ」と、海外での受けとめ方は国内での報じられかたよりもっと深刻な福島原発事故。「それ見たことか」と思いながらふと気づく。今の今、いち早く回復したライフライン、電気、力を頼りに日常を取り戻そうとしている私たち。文明のもたらすものの「背後」にあるものにしつかりと目を凝らしていきたい。

震災前に戻すのではない、私たちの暮らしのあり方を探し求めて。

目次

ひと言	須藤 道子 1
特集 学校が学校になるために 「たれきよ川のキャブ」の取り組み 教職員の協力協同をベースに 伝えたいことを一つもつ 子どもたちと協力して現状を「マシ」に その子らしくのびのびと過ごせる学校	須藤 道子 1 穴戸 保子 2 渡辺 孝之 8 鶴岡 孝則 10 大木 一彦 11 織田紀代子 13
三上講演会報告	志村寿美子 16
教室の報告 バスケットボールの授業で子どもと考えてきたこと	江島 隆二 18
61号特集を読んで 学校は温かく優しい空気の流れる場所に 学校での子どもたちの喜びは何か 正しいこと、大切なことは・・・ それでも学校には希望と未来がある	早坂百合恵 20 勝然たみ子 20 佐々木大介 21 佐藤 澄子 22
臨時総会報告	22
会員の近況 「人間としての矜持を守る」の信念で 25年間を振り返る センターのうごき	伊藤 博義 24 岡田 晶子 24 24

特集

学校が学校になるために

学校の存在理由は何でしょう。大田堯さんは、「科学を背景とした知育に重点がおかれるのは当然としても、子ども一人ひとりが違いや持ち味に応じた出番を与えられながら探求し想像する共同体として、生涯にわたっての人間活力の基礎がきずかれる場として発展させられるべきです。この探求の共同体では、教師はみずから探求者であるとともに、共同の探究活動の組織者であり……」と「なぜ学校へ行くのか」で述べています。学校は問題に満ちていると言って過言でないと思いますが、そのなかでのいろいろの取り組みを考えてみることから、少しでもあるべき学校を考え合おうというページです。

1 学校全員でのオペレッタ

「たれきよ川のカップ」

の取り組み

穴戸 保子

1、はじめに

オペレッタという教材に惹かれるのはなぜだろうか。私がこれまで携わってきたどんな学校の子どもたちもオペレッタに取り組むことにより何かが変わった。教師までも。

本校に赴任して今年で4年目。秋の学習発表会では過去3回学年部でオペレッタに取り組んできた。学年部ではせいぜい20人

前後。それでも、在校生のほとんどがオペレッタ経験者になる。そろそろ全校でオペレッタに取り組めるかもしれないという思いが膨らむ。そんなとき、地区小学校教育研究会音楽部会場校に決まった。ぜひ全校児童でやりたい。その思いを前年度末に職員会議で伝え、了承を得た。

2、なぜ「全校」で創作オペレッタ？

オペレッタを経験してきた子どもたちはみんなオペレッタが好きである。自分の思いを表現し、伝えることが心地よいのだ。今年度本校は、全校児童数が58名である。全校の子どもたちが歌・台詞・表現にかかわることができる人数である。また、異学年の交流は日常的に行われている。縦割りで行う和太鼓への取組み。縦割り班で行う日々の清掃活動。さらに休み時間も異学年の子どもたちが交わって遊ぶ姿がよく見られている。全校の子どもたちで一つのを創り上げていく基盤はでき上がっていると感じていた。

私がオペレッタと出会った頃（1989年代）は楽器店をのぞ

いても、あまり作品は見あたらず、白川小時代は梶山正人先生の作品を手がけることが多かった。「かさこじぞう」「手袋を買いに」「大工と鬼六」など。そんなとき、当時、宮城教育大学の垣内幸夫先生（現：京都教育大学）の薦めにより、職員でオペレッタを創るようになった。私の担任する3年生39名が演じる「花咲き山」である。職員みんなでシナリオを考え、作曲も分担して一つものを創り上げる。実際に目の前にいる子どもたちのために創る喜びと、創ったものをすぐに演じてくれる子どもたちの姿を見る喜びを感じた。

「花咲き山」を演じてから17年たち、総合的な学習の時間で子どもたちに創作させる機会を得た。深谷地区にもきつと地元に住わるいい話があるに違いない。せつかく全校で取り組むなら、ぜひ地元の素材を使いたい。「自分たちのオペレッタ」という意識で誇らしげな子どもたちの姿を見たいと思った。

3、素材をどこから？

深谷に伝わる民話をどう探すか。これは大きな課題であった。いろいろ話を聞いても素材となりうる話はなかった。素材探しをしているうちに5月が過ぎようとしていた。

そんなとき、知り合いの語り部の方から「白石市はもともと民話が少なくて。深谷地区なら『たれきよ川のカッパ』『ぐらかなあ』という情報を得た。『悪さをしたカッパが子どもたちに捕まり、地藏様に助けられて逃げ帰る』という単純な話ということだったが「もう、これしかない」と決め、6月中旬に語り部の方に来校を依頼、ようやくスタートラインに立つことができた。

4、創作開始

創作は、4年生が総合的な学習の時間の中で行うこととした。男子4名・女子8名の計12名である。この子どもたちは私が赴任したときに担任し、オペレッタも2回経験していた。7月に入り

夏休みを目前にした9日間を集中的に使った。暑さの厳しい日々が続いたが、子どもたちは驚くほどの集中力でシナリオづくりにとりかかった。

(1) シナリオの構成

語り部の話はカッパが子どもたちに捕まるところから始まっていた。構成を考えた場合、起承転結の「起」の部分が欲しいと考えた。4年生には「カッパが捕まるには、それなりの理由があったのではないか」と投げかけ、過去に行った村人に対する様々ないたずらを子どもたちは考え出した。クライマックスはやはりカッパが捕まり、地藏に諭され改心する場面である。語り部の話はここで終わっているが、村人との交流が欲しいと考え、最後はハッピーエンドにすることで大きく4場面構成で落ち着いた。

第1場面：カッパのいたずらに悩まされる村人たち

第2場面：子どもたちに捕まってしまった河太郎

第3場面：地藏に諭され、これまでの悪さを悔む河太郎

第4場面：河太郎の話聞き、村人に学びたい気持ちになるカッパたち
鉄砲水の災害を乗り越え共に助け合っ
こうとする村人とカッパ

(2) シナリオ創り

語り部の話を教務主任が一晩で原稿に起こしてきた。このとき、



二人ではない、支えられている」と強く感じた。実は4月の異動で三分の二の職員が入れ替わり、新年度は不安を抱えたスタートになった。しかし、これから取り組もうとしていることは一人ではできない。全校児童を動かすには全教職員の力が必要である。今思えば転入した同僚は、私以上に大きな不安をもったことだったろう。

4年生には語り部の話を元に作った地の文を示し、会話を考えさせた。会話部分がないワークシートに、子どもたちは村人や子ども、そしてカッパたちの台詞を黙々と書き込んでいった。

「できた台詞を黒板に書いてごらん」と言うと、子どもたちは黒板を埋め尽くすほどに自分の考えた台詞を書き出した。それをお互いに見ることで、次の台詞へのイメージもどんどん膨らんでいったようである。子どもたちが考えついた台詞を元に、私はその意図を汲み取りながらバッチワークのようにシナリオを組み立てていった。

第4場面「結」の部分は語り部の話にはない部分。フィナーレをどう盛り上げて終わるか、これについて子どもたちは「カッパと村人たちが仲良くなる」という考えを出した。では、どうやって仲良くなるか。「カッパが水に溺れた子どもを助けたらどうか」という子どものアイデアを生かし、「鉄砲水により子どもたちは溺れ、田畑も壊滅状態になる」ということにした。溺れた子どもを助けてくれたカッパたちに心を許した村人たち、そして今までのいたずらの罪滅ぼしに村の立て直しを買って出るカッパたちという構図ができ上がり、めでたくハッピーエンドのシナリオ構図が完成した。

子どもたちの考えた台詞の数々が手元に集まり、シナリオが一通りの完成を見たのは8月中旬過ぎであった。でき上がったばかりのシナリオを中森孜郎先生に見ていただいた。中森先生からは具体的にいろいろ参考になる話を伺ったが、中でも「結果よりもその過程を大切に考えること」という言葉が強く印象に残った。

(3) 歌を作る

①歌の配置

オペレッタにとつて「歌」は大変重要な位置を占める。シナリオの中に「ここは歌で表現させたい」という部分を見いだしながら「歌」が入る部分を考えていった。しかし正確に言えば、シナリオ作りの段階で「ここには歌が入る」ということが自然に計画されていたようにも思う。まずはシナリオ全体を見通しながら、「ここは村人たち」「ここは子どもたち」というようにストーリーの展開に沿って誰に歌わせるのかを考えていった。挿入曲は次の通りである。

第1場面：村人たちの歌（斉唱）（3・4・5・6年生）

子どもたちの歌（斉唱）（1・2年生）

谷川の流れる子守歌（女声・斉唱）（3・4・5・6年生）

第2場面：子どもたちの歌（斉唱）（1・2年生・全員）

第3場面：河太郎の歌（独唱→斉唱）（4年生・全員）

地蔵の歌（独唱→斉唱）（6年生・全員）

河太郎と地蔵の歌（二重唱→二部合唱）

（4・6年生・全員）

第4場面：カッパと村人たちの歌（斉唱→二部合唱）（全員）

員

②歌詞作り

「作詞」では、「たれが歌う歌なのか」「どんな状況で歌う歌なのか」「どんな気持ちで歌うのか」などを押さえると、子どもたちは案外抵抗なくいろいろな言葉を書き出した。また、台詞として考えられた言葉から歌詞に拾うこともあった。全員に全部の曲の歌詞を作らせる時間的余裕はなかったため、子どもたちには自分が作りたいと思う曲から取りかかせた。



③ 作曲り

夏休みが目前に迫り、正直焦った。まだ、曲ができていない。4年生担任に頼み込んだら、快く総合的な学習の時間を夏休み直前まで入れてくれた。

「創作オペレッタ」である以上、作曲りも子どもの力を使いたかった。子どもたちに、いきなり「さあ、作曲しましょう」といっても無理な話である。まず、出だしの1フレーズを与え、曲の続きを作らせることにした。子どもたちは教室内に散らばり、それぞれに歌詞を口ずさみながらメロディを考えた。そして、何か一部分でも思いついたらオルガンの所に来て歌わせた。メロディらしきものができている子どももいれば、歌詞にリズムだけが付いて唱えているだけのような子どももいた。しかし、そのリズムだけでも貴重な素材である。むしろ、無理に音の高低を付けようとしていないので、言葉のもつリズムを素直に表現したものが多く、後の補作の時には大いに役立った。

私は、子どもたちが口ずさむメロディやリズムを記譜していたが、オルガンには4〜5人の行列ができていた。「子守歌」は音楽の堪能な教務主任に応援を頼んだ。「子守歌」は、曲のイメージを考えた後、それぞれが考えたメロディをつないでいき、1つの曲に仕上げていったそうである。

時間がない中で曲全てを作るのは無理だと考えた。しかし、どの曲にも子どもたちの思いを少しでも入れたいと考え、部分的にでもリズムやメロディを作らせ、記譜した。本来なら夏休み中に曲を完成させ、まず歌を教えるところから練習開始としたいところであったが、夏休みが終わっても未完成の曲がいくつか残ってしまった。オペレッタ後半の数曲は、すでに台詞の練習が開始してからようやくでき上がるという苦しさになってしまった。

④ 補作・編曲

せつかく異学年で取り組むのであるから、下学年の子どもの声・上学年の子どもの声などバラエティに富んだものにしたと考えた。また、ソロ・重唱・合唱など演奏形態もいろいろと取り入れようと考えた。最終的には①に記した場面のように様々な形態の曲となった。村の子どもたちのあどけない歌声、谷川のせせらぎの女声だけの柔らかい声、全員による二部合唱など、同学年だけでは得られない変化に富んだ歌声の仕上がりを目指した。

今回のオペレッタで、どうしてもやってみたいことがあった。それは、パートナーソングを作ること。つまり、2つのパートがそれぞれ違うメロディを歌っても、同時に歌ってきれいに合う曲に仕上げること。

これは二部合唱を仕上げるより子どもにとっては歌いやすいと考えた。1年生から6年生まで一緒に歌ってハーモニーの幅を出すにはパートナーソングにするのがいいと考えた。理由はもう一つ。この民話は「カッパ」と「地蔵」、「カッパ」と「村人」という相対する対象が顕著である。それならば、それぞれに違うメロディを与えて、最後にはその2つのメロディを重ねて二部の響きを作るのがふさわしいのではと考えた。同じ和音進行にしなければならないため、メロディライン優先とはならない部分もあったが、上の2つの理由からパートナーソングにしたことはよかったと思っている。また、この民話の中でも特にこだわりたいと目を付けた「人の助けを喜びに生きていく」という歌詞の部分は、パートナーソングであっても、あえてユニゾン（斉唱）で歌わせることにして、2つ



の対象の歩み寄りや統一感の効果をねらった。

初めは村の子どもたちだけに歌わせるつもりであったが、部分的に全員で歌わせた方がよいと考えた曲があったり、村人たちの歌には台詞を挿入した方がいいと思いついたりなど、練習の過程でいろいろなアレンジを加えていった。紙面だけで考えたときと、子どもたちが目の前で演じたときとの違いは大きい。子どもたちの声や動きに触発されて、思いついたことをいろいろと試しながら入れていくことは、この上もない楽しい作業であった。

5、キャストイング（配役決定）

（1）配役の分担（9月6日）

学年あるいは学級で取り組む場合は、すぐに配役の希望を取ってスタートするところであるが、今回は全学年に役を与えたい。そこでどの学年をどの役に当てるかを相談した。

学年の発達段階や人数、そして子どもたちの個性。これらのことを考えながら配役を分担していった。動きはほとんどないが台詞が多い地蔵役は、6年生男子がふさわしいということにすぐ決まった。カップ役は4・5年生男子に与え、オーディションすることにした。

1・2年生は村の子どもの役、いつも活発な3年生男子は村人役が適役となった。3・4年生女子は、体の柔らかさによる表現を期待して谷川のせせらぎ役をあてた。5・6年生女子は村人役とし、語り手も女子が担当することとした。

学年の分担が決まり、次は学級ごとに希望を募ることにした。しかし、このオペレッタで重要な役となるカップ役は、公開オーディションをすることとなった。

（2）全校児童に読み聞かせ（9月8日・朝会にて）

オーディションに入る前に、でき上がったシナリオを子どもた

ちに読み聞かせることにした。役のイメージがつかみやすいように、教師4人で役割読みをした。教頭は地蔵役、教務主任は河太郎役、他の2人が村人役・子どもたち・語り手などを分担した。

（3）公開オーディション（9月14日）

語り部の話に登場するのは1匹のカップだけであったが、表現の効果と教育的配慮から、「カップたち」として複数のカップを登場させることにした。

公開オーディションの目的は2つ。1つはカップの中でも中心となる河太郎役を決めること。2つ目は公開オーディションをすることで全校児童の意欲を高めること。

体育館に全校児童が集まり、いよいよオーディションが始まった。河太郎役に立候補したのは4・5・6年生男子の13人中8人が名乗り出た。同じ台詞を1人ずつみんなの前で語った。どの子も思った以上の迫力で台詞を語った。これでは選考が難しいと考え、急ぎよ「泣き」の表現をさせることにした。子どもたちに捕まった河太郎が、石碑にくくりつけられ地蔵様に脅され「そりゃあ、あんまりだ」と泣きだす場面である。2人が候補として残ったが、結局、ダブルキャストにすることで意見がまとまった。

この公開オーディションをしたことで、子どもたちの心に火がついた。私が担任している1年生でも、「この役はほくがやりたい」「私はこの台詞を言いたい」と学級オーディションも大いに盛り上がった。そして、配役が決まったところから廊下



の掲示板にその名前を貼り出していった。

オペレッタは、確かに中心となる人物はいるけれど、一人一人が主役という思いで参加しなければ、いいものにはならないと思っっている。その意味で「自分がやりたい役をオーディションで勝ち取る」という手順を踏むことは大切である。

6. いよいよ練習開始

(1) 教師の分担と子どもへの働きかけ

配役が全て決まり、練習がスタートした。本番まであと1か月と少しである。それぞれの役の練習を同時進行でやらなければ間に合わない。練習には毎日1時間を当て、教師も分担してパート練習を担当した。校長も教頭も学級担任も、毎日1時間のオペレッタ練習に総掛かりとなった。学校全体がオペレッタでいっぱいになった。

シナリオの読み合わせをしているうちに、子どもたちは自分の演じる役のイメージを少しずつ膨らませていった。なかなかイメージの湧かない子どもには、その時の周りの様子や状況を考えさせ、自分で表現を考え出すように仕向けた。「こうしなさい」ではなく「こんな時だったら、どんなふうに動くかな」「どんな気持ちで叫んでいるのかな」などと役になりきらせ、表現を引き出すようにした。ただ、子どもが考える動きだけでは動きに広がりが見られなかった。時には、教師がいくつかの動きをして見せ、自分のイメージに合う動きを選択させることで豊かな表現に変わっていった。さらに、「せせらぎと濁流は同じ動きではないはずだよ」「自分の子どもが死にそうなのに、そんな声では必死さが足りないぞ」「本当に気持ちよく泳ぐには、どんなふう泳ぎたいかな」「もう溺れて沈みそうなのに、そんな顔じゃだめ」こんな働きかけを重ねていくうちに、子どもたちの表現はより質の高いものに変わっていった。

(2) 練習内容を振り返る

2時間目の練習が終わると、業間休み時間を使って、そのつど簡

単な話し合いをもった。自分の担当したパートで迷ったこと、悩んでいること、見ていて気付いたことなどを率直に言葉に出し合った。そのまま体育館で話し合ったので、表現の場所やパートごとの動かし方など、イメージを共有しながら話し合うことができた。このように振り返る時間をもったことは、次の練習内容をはっきりさせ、子どもたちの表現を高めていくのに大変役立ち、1回ごとの練習が充実したものになった。

全体の通し練習ができるころには、練習の様子をビデオに撮り、その映像を見ながら検討会をもつこともあった。全体の様子をビデオで見ると、今まで気付かなかったことにも目が向き、たいへん有効であった。

(3) 指導時間の確保

学習発表会練習として教育計画には、8時間が設定されていた。もちろんそれだけでは足りず、国語・音楽・体育の時間も活用した。9月中旬から始めた毎日1時間の練習の他に、昼休みや放課後を使い、次のような練習も取り入れた。

○河太郎のソロ、地蔵のソロの歌の練習

○谷川の流れの子守歌の練習

○せせらぎの表現の練習

7. より良い表現を求めて

学習発表会の前に、大河原地区小学校教育研究会音楽部会場校としての役目がある。そこでは、練習の様子を会員の先生方に見ていただくことになった。その研究会の前に、中森先生と北村信子先生（青葉女子学園専門官）のお二人に来校していただき、第4場面を中心に1回目の指導を受けた（19月29日）。研究会までにやるべきことははっきりした。

2回目の指導が研究会の日（19月28日）である。第4場面の手直



しした部分を見ていただいた。会員の先生方には、実際にお二人の先生が子どもたちに話しかけ、指導を受けているところを見ていただいた。フィナーレの歌は、会員の先生方にも一緒に歌っていただき、子どもたちは満足でもあり、誇らしげでもあった。

本番の学習発表会まではあと1日である。中森先生が言い残された「せせらぎの表現の房の色は、鉄砲水の濁流では色を変えた方がいいのではないか」という指摘を見逃すことはできない。その日の夕方には、校長室のテーブルの上に新たに求めた色で作られた房が積み上げられていた。

業務員は河太郎が結びつけられる石碑を見事な仕組みで作りました。事務職員と養護教諭は、あつという間に谷川の流れの表現に使う房をたくさん作り上げた。文字どおり総力戦であった。これで全員がかかわれたわね」という言葉に校長の思いが表れていた。

8、終わりに

全校創作オペレッタをしようと思いつてから、完成まで1年以上が過ぎた。

全校児童が1つのことをやり遂げようと必死になった。我々教師もひとかたまりになって、子どもたちの一生懸命さに応えようとしていた。目に見えない何者かにくいぐいと後押しされるように、毎日少しずつ目指すものに近づいていく実感があつた。みんなと同じ体験を共有することの心地よさを感じた。

中森先生と北村先生は、学習発表会当日もわざわざ学校に足を運び、見届けてくださった。保護者や地域の方も例年以上にたくさん集まり、子どもたちの熱演を温かいまなざしで見守ってくれた。

数日後、今回貴重なご指導をいただいた北村先生から、子どもたち宛に心のコもった丁寧なお手紙をいただいた。全校児童が集まって、当日のビデオを見ながら打ち上げをしようと予定してい

た朝だった。子どもたちの配役一つずつに、お褒めの言葉が綴られていた。子どもたちに読み聞かせると、みんな身を乗り出すようにして聞き入った。どの子どもの顔も晴れがましく心からうれしそうであった。

今は一つの山を乗り越えた充実感と安堵感が強い。しかし、この山を一緒に越えた子どもたちに、次の山を用意してやることも我々教師の仕事かとも思う。今回の仕事を振り返り、ゆつくりと次の山のことを考えてみようと思う。

(深谷小学校)

2 今、私の学校では

教職員の協力協同をベースに

渡辺孝之

1. 1年に4か月多く働く日本の教師とは

日本の教師は、OECD加盟国の教師たちより1年間で4か月も多く働いている(表1)。1年は12か月しかないのだから、この数字はにわかには理解しがたい。日本の教師の月労働時間は204時間、OECD平均より799時間多い。換算すると4か月多いことになる。

その違いの原因は表2から読み取れる。慢性的な残業に加え、夏季休暇や有給休暇もほとんどとられていない(制度的には夏季特休4日、有給休暇(年休)20日は付与されているが年休はほとんど消化されず繰り越され、霧消する)。

過労死など働き過ぎによる労働災害の多発に対する労働者のたかひにより、厚労省は月80時間の超過勤務をした労働者は医師

表1 年間総実労働時間の比較

	所定内労働時間	所定外労働時間	計	教員との差	月(1日)当たり
日本の教員	1960	489	2449		204.0 (9.03)
OECD 教員平均	1650		1650	799	137.5 (6.25)
製 造 業	日本	1794	209	2003	446
	アメリカ	1733	229	1932	487
	イギリス	1749	125	1874	575
	ドイツ	1538		1538	911
	フランス	1537		1537	912

※厚労省労働基準局推計(「データブック国際比較2009」)をもとに全教作成
 ※日本の教員の所定外労働は、平日および休日の平均残業時間、持ち帰り仕事は含まず。

表2 日本とフィンランド・スコットランド・イギリスの教員の違い

	学校を出る時刻	週の勤務時間	休憩時間	就寝時間	夏季休暇
日本	19:32	55時間30分	19.9分	23:25	5.7日
フィンランド	15:29	31時間20分	45.7分	22:42	63.2日
スコットランド	17:10	38時間00分	49.6分	22:55	36.2日
イギリス	17:36	42時間30分	44.7分	22:40	29.7日

2007-2008年度「教職員労働国際比較研究」:2010年教育総研報告書より

なただ働きで金までもむしり取られている。教育は子どもたちの人格の完成をめざして行われる営みである。それは教師という人格を持った人間が子どもと向き合い、真剣に働きかけることなしには成立しない。学校が学校となるためにはなんといつても、子どもたちに働きかけることのできる教

による面接指導をする通知を出し、文科省もこれを追認した。現実には統計に現れない「かばんいっばい」の持ち帰り残業や、平均をはるかに超える激務をこなしている学校・教師は数多く存在する。日本の教師は、まさに自己の体と心を削るようにして働いている。

私の試算では、月80時間の超過勤務は月22万円もの賃金に相当する(2級19号の場合)。日本の教師は体と心だけでなく、膨大な

員を増やすことである。初任者(2級5号)の賃金は17万2899円、多くの教師の超過勤務分でもう1人の教師を雇うことができる。全教の試算によれば15万人の教師が不足しているという。OECD加盟国対GDP比最低の教育予算を引き上げ、教員を増やして欲しい。最低の予算でPISA Aランクだけを上げるといふのはあまりに虫が良すぎる話である。

2. 今学校でできることは

10年度から、私は学校で教務主任となった。私のテーマは、学級担任が子どもたちと向き合い指導に専念できる条件をいかに作るか、である。

そのために、専科による空き時間の確保、複数教師による指導体制、必要時数の精選、校内研究の見直し、会計や日直等業務作業の見直しなどに取り組んできた。

専科教員は宮教組の働きかけで全県に広がった。いまや教育事務所長もこれを推進すると公言するようになった。学校は教頭までが授業をする教員として算定されている。授業をするとは教師として自分で教材研究をして子どもへの指導に当たることであり、担任の補欠ではない。本校では5・6年の理科を専科とし、週3時間の空き時間を確保している。

3年生以上の算数には、教頭・教務がT2として入り、つまりいている児童のサポートに入る。東松島市では緊急雇用と特別支援で2人の支援員を学校に派遣しており、担任の要望を聞きながら学級に入ってもらっている。高学年の家庭科では地域からミシンボランティアを募り手伝っていた。また、校長も書写指導を積極に行っている。体育の水泳や器械運動など技術習得が必要な単元では担任が「お手伝いをお願いします」と声をかけてくれ、私としても有難い。



次年度から2年生でも6時間授業が生じるなど、時間割は満杯である。標準時数を超える「余裕時数」は必要な時数に精選し、放課後子どもたちの指導に当てることもできる時間を確保することにした。

時数増は、会議の設定も困難にしている。そのために校内研究の見直しを図った。校内研究は同僚として目の前の子どもたちへの指導力量を向上させるためのものである。日々の授業に役立つものをしようということ職員で確認した。そのために従来の「授業研究」を「授業を見合う会」とし、事前研・事後研・指導案をなくした。授業に対する感想・アドバイスは研究主任がメモを集めてコピーして配る。合わせて「研究全体会」を「授業カンファレンス」とし、毎月1回程度、研究テーマに基づき教師がわかったこと・悩んでいることを出し合う「しゃべり場」のようにした。紙数の都合で内容には触れないが、背伸びせずにみんなが一歩ずつ進む楽しさを感じている。

煩雑なわりに公正さを求められる会計事務の軽減には「先生方の負担を軽減したい」と言ってくれる事務職員が大いに力を発揮し、「日直業務は管理職の仕事」との私の主張に応えて教頭は先生方に「校舎を回らなくてよい」と言ってくれている。

学校が働く人間の組織体として機能するためのベースにあるのが「同僚制」である。職員室にはいつでも淹れたての珈琲の香りが立ち、みんなの好きなお菓子が器にあふれるように置いてある。休み時間、チョコを口に入れ、「よし！」と気合を入れ教師は教室に向かう。少し時間があれば患痴も言い合う。ほぼ全員が参加する月に1度の親睦会主催の飲み会、職員旅行、泊付きの忘年会・送別会、そして過半数の組合加入率。それらを通してささえ合う同僚がいることを実感する。それなしには働き続けることは困難なのが学校の現状である。

新教育課程は、内容が増えたのと同時に方法までも規定し、教

師が横道にそれにくくなっている。これを安心とみるか、創造性が奪われたとみるか、多くの教師が理想と現実のハザマで悩んでいる。チャレンジできるゆとりが欲しい。

毎週水曜日を、持ち帰りなしの定時退庁デーにしたいと思うが、そのために何の仕事を具体的に削るか名案が浮かばず、帰宅が遅くなる日が続いている。

(浜市小学校)

3 今、私は

伝えたいことを一つもつ

鶴岡孝則

教育行政は次々に新しい施策を思いつき現場に押しつけてくる。「学力向上サポートプログラム」「志教育……」。「心のノート」なんて遠い昔話のようだ。予算はつかない、人員は増えない、時間は保証されない。その中でいったい何ができるのか。内容もさることながら発想自体が大いに批判されるべきだ。しかし、同じような思想傾向が我々にもあることを認めなければならぬ。

私の勤務する学校では、二年前までは「PISA 型読解力」を身につけさせるためにはどうしたらよいかと研究していたが、今年度(平成22年度)は「算数的活動」を校内研究で取り上げている。「PISA 型読解力」は雲散霧消、今や誰ひとり口にする者はいない。充分な理解もないまま流行のテーマを追いかけ、新しいものが出てくれば、以前のテーマは弊履の如く捨て去って顧みない。常に新しいもの、他



とはちがつたものを追い求めなければならないのだろうか。

次のようなこともあった。児童が落ち着かず問題行動が目立った時期、「子どもたちに意欲をもたせ、より活気のある学校にするための手だて」が話し合われた。出てきた意見。「持久走大会に向けて、業間か昼休みにみんなで走る」「クラスのイベントを工夫する」「たてわりとは別に、異学年交流などを工夫して取り入れていく」など。結局は挨拶運動をすることになったのだが、私はこれらの意見に違和感を覚えた。何か新しいことをすればいいんだ。これこれをしましたという形が残ればいいんだという類型的な思考方法に、私は「授業の充実、そのための教材研究の時間の確保」と記したが「顧」にされなかった。

「センターつうしん61」の座談会の記事を読むと、よい授業をしたい、そのための教材研究の時間が欲しいという若い先生方の切実な思いが伝わってくる。担任をしている教師なら皆同じ願いを抱いている。

今、大切なことは何だろうか。子どもに情熱をもつて伝えたいものを教師が何か一つもつことではないかと思う。文学でもよい、合唱でもよい。版画でもよい。歴史でもよい。教育課程にあるから教科書にあるからではなく、どうしても子どもに受け渡しておかなければならない熱いもの、そうした核をもつことだ。瀬成田実さんは、周囲を説得して中学校の宿泊学習で「わらび座体験教室」を実施した（「カマラード」No.22）。瀬成田さんは「わらび座病」と自嘲気味に語っているが、「わらび座病」大いに結構とエールをおくりたい。一人ひとりの教師が「〇〇病」になり、それを伝えていくならば、子どもは必ずやその熱意に感応するだろう。「〇〇病」は文化の継承であり学問の発展である。

自分なりの「〇〇病」がまだ見つからないならば、とりあえず読書することを勧めたい。どんなに疲れていても、寝る前に十分でもよいから本を読む。現実には流されつばなしではなく、自分で考える習慣をつけたい。考えていく中から自分のやりたいことが

みつかるのではないだろうか。

ちなみに私は2年生担任、「俳句病」。1年間に作った俳句を句集にしようと考えている。そんなの教育課程にない？ いや、国語の教科書（東京書籍）に『きせつ』の思い出ブックをつくろう」とちゃんとある。俳句こそ季節の詩。年間計画的に取り組んできたのだ。

今後とも、行政は教師が情熱をもてないように、自分で考えないようにいろいろと押しつけてくるだろう。自分の中に理論と実践をもつ重要性がますます高まっていると思う。

（浦谷第二小学校）

4 中学で私たちは

子どもたちと協力して

現状を「マシン」に

大木一彦

中学校の教員は頑張っている。自分で言うのもなんだけど……。今の学校は駄目だみたいと言われてしまうが、何をもつて駄目だというのだろうか。率直に言って、これだけ駄目駄目な社会（中学生の生活環境）の中で、私は、中学校の教員の多くは、過労死ラインを大きく越えるオーバーワークをして、必死で中学生と向き合い、学校作りに取り組んでいると思う。そのことが、今はあまりにも、きちんと認知されな過ぎであると感じている。うまくいかないかと悩んでいる多くの中学校教師に伝えたいことは、「あなたは充分頑張っているから、無理しすぎないようにね」ということである。



居直るつもりはないが、駄目なのは社会全体のあり様に起因することが多く、一学校・一教師に多くのことを期待されても無理だと思う。また、かつての経験をそのまま語っても、状況や環境が違えば、ユートピアみたいな話としてしか受けとめられないことになってしまう。従って、ここでは、私が今まで勤務した学校で、学校作りをしていく上で、共通して考えていたことを、少し述べてみたい。

中学校は「集団の中の『個人』」としての生活の仕方」を身につけていく場である。

勿論、小学校だって同じ側面を持つのだが、成長段階から言って、そのことに自覚を持つことは難しい。高等学校になると、集団自体が『輪切り』された集団となってしまっている。その点、公立中学校は、原則として地域の子どもがみんな所属する集団の中で生活できる貴重な3年間である。

一人ひとりの子どもに着目することを否定するつもりはないが、自分は自分であるだけでなく、学校の看板を背負った一人の人間であることを強く意識させることが、私の考える学校づくりの基本に位置している。

学校づくりのポイント

①生徒自身の手で、学校行事を充実させ、達成感を味わうことができるようにすること

集団でイベントに取り組んでいく中で、子どもは他者との関わりを持ち、自分を高め成長していくし、その機会が保障されることを通して学校への信頼感を増していく。集団生活ならではの良さを実感できるチャンスである。

現在の勤務校である上杉山中では、合唱祭で大曲にチャレンジし唱いきること、大樹祭（文化祭）を3年生中心に盛り上げていくこと、その際3年はYOSAKOIをかつこよく踊りきることを

予餞式では1・2年が自らを高め合唱やYOSAKOIの文化を3年から引き継いでいくことなど、何でも一所懸命全力で取り組むことがかつこいいこととして、学校文化として定着し『上中魂』という言葉で伝承されてきているように思う。そして、エール・校歌にもきちんと校歌を歌いエールをするということにも繋がってきているように思う。

非行文化が広がってしまった時も、問題行動を多く起こす生徒が、学校行事だけは楽しみにしていて本気で取り組むことが、学校を立て直していくきっかけとなっていたように思う。

幸い、私は教師生活の大半を、生徒会の担当として過ごし、生徒の状況を見て、また、どの程度なら教師集団のコンセンサスとが得られるかを考えて、できる限り生徒自身の手で充実した学校行事をつくっていくというに関わってこることができてきたと思う。

②生徒自身の手で、きまりを考えさせ、規範意識を高めること。集団生活である以上、学校生活には『きまり』はつきものである。そして、きちんときまりを守らせようとする指導とそれに対する反発から、教師・生徒間のトラブルが、時には保護者も入る形で発生する。私も、きちんときまりは守れという方なので、トラブルの当事者となってきたことが多々ある。

私は、「きまりは守らなくてもいいよ」というのではなく、「きまりを教師や学校が一方的に決めて守れというものではなく、生徒自身の手で決めて守るものにする」ためにエネルギーを注いできたように思う。

例えば今年上杉山中では、生



徒会の目安箱に「膝掛けの使用を認めて欲しい」という投書があった。生徒指導部で話をする、「せっかくだから生徒達自身に考えさせたら」と取り扱いが生徒会担当に回されることになった。執行部の生徒が使用上のルールを含めた原案を作成するが、学級委員や委員長に参加する全校生徒委員会では、「これまで使用しなくてもやってこれたのだから膝掛けはいらない」との意見の方が一票多くて可決されず、目安箱や生徒会便りに「認めて欲しい」という意見が多く集まり、再度委員会を開いて可決。職員会議では、生徒達が議論した様子が高く評価され、生徒案をよりゆるめる形で使用が認められた。第三者からは、教師がひとこと「いいよ」と言えばすむ話と思われるのだから、このプロセスで子ども達の「きまり」を守る事への自覚を高めたことが、今後の学校作りにおいては財産となっていく。

どこの学校でも、あるいは旅行的行事であれば学年でも、自分達できまりを決めて守るという経験をさせることは可能だし、そのことを通して子どもは「集団の中の『個』」として、大きく成長するように思う。

「先生って、特別なことをする訳じゃなくて、普通のことを普通にやっていく先生ですよ」

前任校で同僚になった先生に言われた言葉である。その前に勤務していた学校で、私が服装自由化に関わっていたことを知っていて、私の言動に注目していてくれたらしい。そう言われて私はうれしかった。

私はスーパースターでもカリスマでもないの、一人でできることはたかが知れている。従って、自分にできることというのは、子どもたちと教師集団と協力して、現状を少しでも『マジ』にしていくことである。その一端が、今日ここに書かせていただいたことである。

(上杉山中学校)

5 親としての願いは

その子らしく

のびのびと過ぐせる学校

織田 紀代子

私は現在、アメリカ東海岸にある地方都市の郊外に住んでいます。13歳の息子が一人います。私は大学卒業後、宮城県で6年間小学校に勤めました。宮教大で知り合ったアメリカ人と結婚し、アメリカに移り住み、その後10年近く専業主婦をしていました。(大学の図書館で1年間働きましたが、妊娠出産のため辞めました。)10年近くも学校から遠ざかっていたのに、4年ほど前から日本語学校補習校で教えることになりました。現在は2年生6名を教えています。全校生徒三十数名の小さな補習校で、子どもたちは土曜日だけ通っています。私の地域は日本人人口が少ないので、教員免許を持っている人も少なく、初めて教える人もいます。毎週教えていて、「こんな時、どうしたらいいだろう。」と迷うことも少なくありません。そんな時、まわりの先生に聞いたらどんなにいいだろうと思います。人の授業を見たり、自分の授業を見てもらって勉強できる機会がもたらいいのに、と思うこともあります。20代で小学校で勤め始めたものの、子どもたちはさっぱり言うことを聞いてくれず、悩んでばかりいました。不器用で仕事もなかなか覚えられなかったため、人一倍周りの先生方から指導していただいたと思います。その時は毎日なんとかこなすだけで精一杯で、せっかく丁寧ないろいろなと教えてもらっているのに、それを日々の仕事に生かしていくことができませんでした。

それ以前に、自分には教えてもらうことに対する気持ちや学ぼうとする姿勢、謙虚さが足りなかったと思います。今考えると本当にもったいなく、申し訳ない気持ちになります。教職から離れていた10年間はあまり思い出すことがありませんでしたが、補習校で教えるようになって、「〇〇先生に板書のことってこんなことを言われたな。」とふとした瞬間にその先生の声とともに思い出出すことがありました。20代で教えてもらったことを、40代になって海外でこうして再び使う日が来るとは、当時は想像もしませんでした。

海外に住んでいるため、当時お世話になった先生方となかなかお会いする機会はありませんが、いつか機会があったら、お礼を言いたいと思うていました。同じ学校でお世話になった先生方、サークルの方々、もしこの号を読んでいらつしやったら、いまさらですが、「本当にありがとうございました。」とお礼を伝えたいです。数年前にお亡くなりになった遠藤惟也先生には、若い頃本当にお世話になりました。もう一度お会いして、お話をしたかったです。中森先生と2年前にお会いした時に「学ぶとは何か、教えるとは何か、いかに生きるべきかなど、問いを持ち続けることが大切だ。」とおっしゃいました。中森研で仲間たちとよく聞いていた「フォルシユング」の精神だと懐かしく思い出しました。中森研で芽生えた問い。その問いを持ち続け、自分なりに考え続ける努力をしていきたいと思いました。

個人的なことを長々と書きましたが、困った時に気軽に同僚の先生に相談できる雰囲気や余裕がある職場、職場以外でも一緒に考えたり、共に育っていきける仲間や友人、学ぶ場、そういうものが「こんな学校だったらいいなあ。」という言葉から浮かんだのです。それがどんなにありがたいものかを、今実感しているからです。

私は息子がキンダーガーデンの時から小学校4年生まで5年間、週1日2時間ほど息子の教室に入ってボランティアをしています。

ました。コピー取りや掲示物のはり替え、おやつや準備や片付けなど、簡単な仕事でしたが、教室の隅に座って毎週授業や子どもたちの様子を見るのができ、とても興味深く、勉強になりました。この地域では保護者のボランティアは一般的で、学校でよく見かけます。息子のクラスでは週2、3日ボランティアで保護者が教室に入っていました。そんなに頻繁に親が教室に入ったらやりにくくないのだろうかと思いましたが、アメリカの先生たちは慣れていて、そのオープンな雰囲気はいいなあと思いました。大学院生で自分の勉強も忙しいのに、授業が始まる前の朝早い時間に、マンツーマンで子どもに読み書きを教えに来ている親もいて感心しました。私たちの地域は学校の評判がよく、保護者も誇りに思っているような気がします。それで、自分たちも学校作りに関わっているという意識が強いです。

私は子どもが小さい時から今まで、ほとんど「勉強しなさい。」と言わないできました。やはり受験がないということは大きいかもしれません。中学受験はもちろん、高校受験もありません。市

で二つしかない高校に自動的に全員入学するからです。なので、宿題をちゃんとやって、学校の勉強を理解していればそれでいいので、そんなに勉強しろという必要もない訳です。(最近では宿題も多く、共通テストに追われ、学校現場は余裕がなくなっているという声も聞きますが。)東京の知人と話していたら、有名中学を受験するために小学校の3年生の冬から塾に通い、お父さんが仕事から夜遅く帰ってきて、子どもの塾の勉強を見ていると聞き、そこまでしなければいけないのかと驚きました。受験よりお父さんが過労で倒れてしまわないか、その方が心配になりました。家族一丸となって受験に立ち向かわなければいけない状況なのでしょう。



か。

息子はアメリカの2つの州の公立小学校2校、中学校1校、日本では帰国子女の多い私立の学校に1年間通いました。息子と私たち夫婦はどの学校もとてもよかったです。満足しています。私にとつて一番大切なことは、子どもが毎日喜んで学校に通い、「今日も楽しかった。」と言つて元気に帰ってくることです。親としてそれが一番の喜びです。息子に「どんな学校だったらいいなあと思う？」と聞いてみました。息子は「子どもを中心に、勉強だけをやればいいというのではなくて、いろいろなものを試したり、普通に生活してやらないものを経験できる学校が楽しい。」と答えました。「じゃあ、今までの学校でどんなことが楽しかったの？」と聞いたなら、いくつか教えてくれました。日本の学校で稲や麦、大根を育て、その麦でうどんを作つてみんなで食べたこと、中学で自分で考えてロボットを作つたこと、アメリカの小学校の生徒会で、学校に風車やソーラーパネルを設置するため、募金を計画したことなどです。子どもの口から「子どもを中心として」という言葉が出たことが興味深く、「彼は学ぶ主体として、そういう環境の中で学ぶ楽しさを実感できたの、たなあ。」と親としてありがたく思いました。

子どもの学校を選ぶ際に私たち夫婦が大事にしてきたことは、多様性です。息子は日本とアメリカの二つのバックグラウンドを持ついわゆるハーフです。息子にそのことをあまり意識せず自然に、できれば肯定的に受け止めて欲しいと思つてきました。アメリカでは一般的にお金持ちの住む地域は、テストの平均点も高く、評判のいい学校が多く、逆にマイノリティーや移民の多い地域は所得が低い人の割合も増え、テストの平均点なども低めになることが多いようです。なので、アメリカに住む日本人は、白人が多い学校に子どもを通わせる傾向があるように思います。でも、私たちはたとえお金があつても、お金持ちの白人が90パーセント近くもいる学校に行かせたいとは思いませんでした。マイ

ノリティーが多すぎず少なすぎない所、経済的社会的な背景も多様な所を探しました。選んだ学校は2校とも白人の割合が大体60パーセント台で後はマイノリティーです。とんでもないお金持ちもいれば、普通のミドルクラス、給食費を免除されている家庭もあり、様々でした。息子は「僕は日本にもアメリカにも友達がいるし、英語と日本語が話せるから楽しいよね。」と肯定的に受け止めていて、それは学校の環境による所も大きかったと思います。白人ばかりの学校に通っている日本人のお子さんが「アメリカのお弁当にして。」と母親に頼み、日本のお弁当を持つていくのを嫌がると聞いたことがあります。息子はサンドイッチなどの時もありますが、おにぎりとお弁当箱に日本のおかずをつけていきます。きんぴらごぼうでもなんでも平気で持つていきます。友達に「それ何？」と聞かれることはあつても、特にいやな思いをしたこともなかつたようです。それは学校に多様性を受け入れる雰囲気があつたからだと思います。息子の場合はハーフということですが、それ以外にも経済的なこと、容姿のこと、勉強や運動などいろいろな違いというのはどこにもある訳で、子どもたちがそういう違いを乗り越えて、それぞれが気持ちよく、その子らしくのびのびと過ごせる学校だと思っています。

(在アメリカ)

お見舞いとお詫び

東日本大震災により、被災されました皆様に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

通信、3月末にお届けできるように仕事はすすんでいたのですが、この大震災のため大幅に遅れてしまいました。

特集に原稿をお願いした渡辺孝之さんの学校は幸い子どもたちの犠牲者は出なかつたものの津波の被害をもろに受け、「ここに書いたものは今は画餅だ」と言っていました。私は言葉がありませんでした。

被災地の学校に子どもと教師の笑顔が一日も早くもどることを願うのみです。

(かすが)